

こしえるびと

つむぐストーリー vol.120

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

地域農業の発展を願う

千厩町千厩

佐藤 忠司 さん

家業を絶やさないために

小春日和の穏やかな暖かさに包まれる、千厩町内の山あいにあるリンゴ畑。佐藤忠司さんは従業員と談笑しながら、リンゴ一つ一つの出来に目を配る。

長年高校で教員を務めていた忠司さん。一方で、父の忠一さんが営むリンゴ農園を「いつか自分が継がなければならぬ」と思っていた。しかし、定年退職を控え、本格的に後を継ぐことを考えていた矢先に東日本大震災が発生。その影響で退職は先延ばしとなり、再任職で働き続けることになった。しばらく高校で働きながら農場を手伝っていたが、2022年に忠一さんは他界。忠司さんは47年間の教員生活に終止符を打ち、太陽農場代表取締役就任。経営者としての道が始まった。

より良い農場経営を目指して

千厩町奥玉に開園し32年の歴史を持つ太陽農場。忠一さんが70年かけて培った栽培管理のノウハウを受け継ぎながら、「信頼と実績のおいしいリンゴ」をスローガンに掲げて農場経営に取り組んでいる。人の目がしつかり届くよう、農場の管理を技術担当の大島伸介さんに任せ、品質の高いリンゴが育つ環境を整えている。

販売面では、採れたてのリンゴを売るために、冷蔵庫を所有せずに数量管理を行うのが忠司さんのこだわり。「相手の目を見て会話することを大切にしたい」と、通信販売には取り組まず、対面のみでの販売形態を貫いている。生産と販売のバランスを見極めながら、良質かつ安定した経営を目指している。

仲間とのつながりを大切に

忠司さんにとって農業とは「地域一体となって行うもの」。しかし、果樹品目に限らず、農家の減少と高齢化は深刻な問題であり、地域社会そのものの存続が危ぶまれている。新規就農者を含めた農業仲間と手を取り合いながら、地域の人々との強いつながりを守り、仲間を増やしていきたいと考えている。「農は国の礎なり」。忠一さんが生前大にしていた言葉に胸に、地域農業の発展を目指して経営に取り組む。

農場には、リンゴを買いに訪れた人と楽しく会話をする忠司さんの姿がある。人を、仲間を、地域を大切にしている。忠司さんの挑戦はまだまだ始まったばかり。地域農業の明るい未来のために、忠司さんは今日も歩みを進める。



PROFILE

佐藤 忠司さん (71)
Tadashi Sato

千厩町千厩

1953年千厩町千厩生まれ。長年にわたり高校の教員を務める傍ら、家業のリンゴ栽培の手伝いに従事。2022年、有限会社太陽農場代表取締役役に就任。リンゴ2.3%。妻、息子、母と4人暮らし。

太陽農場

